
哀の歌

やすゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀の歌

【Nコード】

N6056F

【作者名】

やすゆき

【あらすじ】

昨日まで笑顔だった両親が喋らなくなり、家族には深い溝が出来ていた。たった一つの言葉の所為で家族がバラバラになりそうだった。離婚。家族にとっての幸せって何なんだろうか……。

(前書き)

一般家庭に起こる、真っ黒な出来事を書きました。
暗い話が苦手な人は注意が必要です。

限らない幸福を求めるならば、家族愛だと思っている。

それは、単に父親とか、母親とか、兄や妹、姉や弟と言った親族、つまり肉親が傍に居てくれるという、漠然とした理由ではなく、根本的な何かが繋がっているからだと思っている。

家族って何？両親って何？幸せって何？悲しみって何？

色々な疑問が浮かび、自問自答の日々を送る中だっただろうか。

俺が始めて、自らの生みの親に疑問を抱き始めたのは、今に始まったことではない。

俺の苗字が変わった日。

それは、ある意味で言う決別の時だったのかもしれない。

俺の家族は4人家族で、父親、母親、俺、妹の家族構成だ。

どの一般家庭にもあるこの家族構成だが、日本に留まらず、世界各国でこの家族構成は存在するだろう。

結局のところ、現在の俺の家族構成は、母親、俺、妹なのだ。

世間一般で言う、離婚と言うやつだ。

やっかいなことに、俺の母親と父親が離婚した際に生じる慰謝料や教育費は出ないのだと言う。

そのところは俺は詳しくないので分からないが、これは母親に聞かされたことなので、そうなのか。と、心に留めて置くことしかなかった。

俺の心の中には父親は存在せず、ただの他人でしかなかった。

俺の家族は至って幸せだった。

昔は、そう、昔は。

俺の父親は一風変わった、特殊な仕事柄ゆえ家に居ることが殆ど無かった。

居ても、俺とは遊んでくれず、ただ寝ているばかり。

仕事で疲れているから寝ているのだと思っていた。

俺の父親は良く働く人で、月収も50万は行くか行かないかだったらしい。

らしい、と言うのは、俺自体が父親に関心が無いからだ。

言っておくが、俺と父親は血が繋がっている。

さて、収入も安定すれば母親は？となる。

母親は家事育児に見舞われる前。つまり結婚をするまえは銀行員だった。

そして、銀行員から下着専門の営業ウーマンになっていた。

そして、また職が変わった。

今度は化粧品の仕事だった。

母親は仕事熱心だった。

肝心の子供、つまり、俺と妹は家に居た。

だが、寂しくは無かった。

俺は小学校の低学年、下手すれば保育所時代から既に【親が居ないのほしょうがないこと。仕事が忙しい】と、思っていた。

俺と妹は一つ違いなのだが、俺は元々家に置いてあったゲームをするしかなかった。

そうでしか、自らの寂しさを紛らわすことが出来ないような気がした……。

俺が小学校の頃くらいだろうか、父親の癖が見つかったのは……。

この頃以前から父親はギャンブルが好きでよく金を使っていたのだが、その頃はまだ遊び程度だった。

父親が帰ってくるのはいつも深夜零時を回るか回らないかくらいだった。

顔を見れば分かる。

今日の成績が。勝ったのか、負けたのか。

そして、また始まる母親と父親との夫婦喧嘩。

俺が耳にしたと言うか、聞きたくないのに耳に入ってしまった会話。この会話を聞いたときからだろうか、自分の父親に疑問を持ち始め、母親を頼るようになったのは……。

とうとう、父親の浪費癖が露になった。

それは俺が高校1年の時くらいだったと思う。

よく覚えてないのは、その出来事があまりにも衝撃を受けたからだ。その日、俺は母親と二人でファミレスに行っていた。

食事を取るためでもあるが、もう一つの目的があった。

「ちよっと、食べるのやめて話を聞いてくれる？」

か細い声で喋る母親の顔は酷くどんよりと曇っていた。

「うん」

何事かと俺は耳を済ませていた。

ファミレスの中の空気が、俺と母親が座るボックス席の空気と違っていた。

「私、離婚するかもしれない」

本当に唐突だった。

本当に何のことか一瞬分からなかった。

え……、と言葉を発する俺より先に母親は口を開いた。

「父さんね……パチンコでいくら使ったと思う？ 60万よ？ 60万。凄いよね、どうやったらそんなに使えるのかな」

もはや、あきれ返ってものが言えないとはこのことだった。

実は俺の家は自営業だったのだ。しかも、潰れるか潰れないかの瀬戸際に立っている、ちょうどこの時期に使った60万。痛すぎる出費だった。

「なんで・・・」

俺がそこまで言うのに、母親は喋り続けた。

「今、離婚したら、あんたはどう思う？」

答えは一つに決まっているだろう。

「イヤ」

何より悲しい事は、この時点で父親と別れることが悲しくないと言うことだった。

それほど、俺自信が父親に愛想を尽かしていることだった。

じゃあ、何故俺はイヤと言ったのだろうか。

このとき、俺の中で始めてというか、家族って何だろうって頭の中に浮かんだ。

父親なのに、血が繋がっているのに、愛想を尽かしているのに・・・

色々と考えても、考えても出てくる答えは一つだった。

家族。

このたったひとつの単語の中にどれだけの意味が含まれているのか。

俺は父親に対して愛情と言うものを貰ったかどうか母親に尋ねた。

母親は平然とした様子で答えた。

「無いよ」

雑踏のファミレスの中で俺の思考はストップしていた。

もう、何がどうなっているのか、分かることは唯一つ、離婚しそう。世間では離婚は当たり前となっていて、俺は他人は他人だとは思っていないかった。

俺の住んでいる地域は田舎中の田舎なので、離婚などと分かれれば忽ちのうちに話題となるだろう。

苗字が変われば人も変わる。

この言葉を聞いたときは成る程とは思ったが、実際にそうなったとき、自分はどうなっているだろうか。

昔は考えられなかった。

それは、家族愛と言う幸福がまだ続いている時期だったから。

あらためて、考えると俺が高校2年になると、やはり学費が増える。それは、妹が高校に入るからだ。

俺がファミレスで母親と話したとき、俺は母親に言った。

「高校を卒業するまで離婚は待って。俺が就職に就くまで待って。

あいつが可哀想だから・・・」

あいつとは妹のことだ。

母親は頷きながら分かった。とだけ言い、運ばれた料理に口をつけはじめた。

俺もそれにつられるように料理を口に運んだ。

これほど不味い料理は他になかった。

俺はこの味を一生忘れることは出来ないだろう。

さて、そろそろ父親との会話も無くなってきた。

とは言っても、元々少ない会話なのでどうと言うことはないが・・・。

俺は母親に薦められ、自営業の手伝いをすることにした。

手伝いと言っても、ちゃんとバイト代は出る。

俺は必死に働いた自分の金で初めてものを買った。

一瞬で消えた、390円。

俺はお金の有り難みと、お金の難しさと言うのを知った。

それは、俺が父親に対して少しばかりの同情をするのとはほぼ同時だった。

やはり、母親は泣いていた。

夜な夜なすすり泣く声を聞きながら俺は母親の話を聞いていた。

また、父親が金を使ったようだった。

隣に座っているのは妹だった。

「父さんなんか嫌いよ！ もう、離婚すればいいじゃん！」

まったくその通りなのだが、それは今後の事を考えて言っているのか。

俺は妹に聞いた。

「だって……イヤよ……母さんが可哀想じゃん……」

……」

妹も目に涙を浮かべていた。

ただ一人、俺を除いてだが。

俺は元々冷たい人間なのだろうか、いや、そうさせたのは父親なのかもしれない。

俺が小さいころ遊んでくれたのは母親だけだった。

唯一の親が母親だけに感じられたのは、今回が3度目だった。

こんな状況が今も続いていた。

いつ離婚するとも分からないこの状況下で俺は私立校に通っている。学費は高いがその分、中身は濃い学校だ。

俺はちゃんと就職に就き、母親を楽にしてあげたいと考えている。

それを母親に告げたとき、頬に伝う涙を見たのは、また、別の話だ。今、再び思う。

家族って何？

血が繋がっているから家族？

だったら、俺の親父は？

何で俺は親父を親父と思えないの？

家族って何なんだよ……。

俺が自問自答する日々を送るなか、母親の離婚しようか、と言うメールが来たのは今回が2度目だった。

どうしてこうなってしまったのか。

根本的な解決にはさしてならず、俺は眠りから覚めた。

リビングでテレビを見ている親父に俺は言った。

「今日、仕事ある？」

「ああ」

たった、それだけの会話。

台所のテーブルに置かれたコンビニ弁当。

俺の分の弁当がそこにあった。

「これって俺の？」

「ああ。飯食ったら仕事行くぞ」

俺はこんな些細なことで、家族愛と言うものを感じていた。

いつか、俺の苗字が母方の名前になるまで、俺は、親父を親父と呼ぶことにした。

それは、俺が始めて父親と呼べる存在に近づいたように思えたからだった。

まだまだ、俺の苗字が変わることはなさそうだ。

確信は無いが、そうだろうと思う。

出来れば、このままずっと、4人で過ごして行きたいと思う。

俺は、このままずっと続けばと願うばかりだった。

（後書き）

この作品を読んでくださった方々、本当にありがとうございます。
この作品を書くに当たって、自分は本当に幸せなのだろうか、と、考えました。

これは、読者の皆様方も考えてみてください。

何よりも大切なもの。何よりも大事なもの。それは家族です。決して、粗末にしたりしてはいけません。

今一度、家族と言う言葉の意味を考えてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6056f/>

哀の歌

2011年1月27日05時49分発行